

10年越しのこいわずら恋煩い

目次

10年越しの恋 <small>こいわずら</small> 煩い	5
Fell in love at first sight	257

10年越しの恋こい煩わずらい

『……好きだ、ユウカ』

少年っぽさが残る声、鼓膜を震わせる。ドクン、と心臓が大きく鳴った。

正面から真っ直ぐにぶつけられる真摯な眼差しに、つかの間呼吸を忘れてしまう。

『お前が好きだ』

彼は緊張からか、眉間に皺を刻んでいる。ぐつと拳を握った腕が、一拍後には私の肩を包み込んだ。彼が愛用している香水の匂いが鼻腔をくすぐる。成長途中らしいしなやかな腕に、小柄な私の身体が抱き込まれた。

直球すぎる愛の告白に、戸惑いを隠せない。

顔が火照るのは、慣れない体勢だから。

再び名前が呼ばれ、顔を上げるよう促される。ゆつくりと、呼吸を整えながら見上げたが、至近距離にもかかわらず彼の顔は霞がかかっていた。

『……ウ、カ』

先ほどまでの声は、もう届かない。不快な雑音とモザイクが彼の姿を侵食して、存在を消してい

く。触れられていた箇所から熱が奪われ、身体に巡る甘やかな緊張感も霧散した。

見上げる先は、光すら遮られる霧の世界。

しんとした静寂のなか、先ほどまで傍で愛を囁いていた少年を思い浮かべる。だが、思い出そうとするはしから、彼の痕跡が失われていく。

匂いも、声も、熱も、眼差しも。

全てあやふやな霧に吞み込まれ、沈んでいった。



「……かさん、優花さん。起きてください」

「ん、ん……」

隣から声がかけられ、ゆつくりと意識が浮上する。鈍い思考を回転させ、もそりとアイマスクをずらした。

光が眩しい。糊で貼りつけられたような臉を押し上げてから、手で口を覆う。ふあ、とあくびが漏れた。

「おはようございます、優花さん」

隣からほっとした声とともに、苦笑する気配がした。

「……おはよう」

「そろそろ着くので、シート戻して、入国手続きの紙に記入しないと」

そう言われ、私は座席の収納にしまっておいた細長い紙を引っ張り出し、ペンを探す。そんな私に、隣の青年がペンを差し出した。

お礼を告げながら、穏やかな微笑が印象的な数歳年下の彼を見つめる。

寝ぐせがつきにくいウエーブヘアに、はりのある頬。半日以上の機内の旅でも、お肌のコンディションは左右されないらしい。髭を一日剃らなくてもツルツルな肌は若さなのか、単に体毛が薄いだけなのか。

すっかり見慣れた端正な顔をじっと眺めていたら、彼が訝しげな表情を浮かべた。

「どうしました？ まだ実は寝ぼけてます？」

「え？ ううん、ただ……昔の夢を見てた気がして。蒼馬君に名前を呼ばれたとき、デジャヴみたいなを感じた気がするんだけど……」

「その夢がなんだったのかは思い出せない、とか？」

「うん」

口許を手で覆いながらも一度あくびをする。片手ではさばさな髪を整え、座っていたシートを元の位置に戻した。

私、雨宮優花が今いるのは、飛行機のビジネスクラスだ。通路を挟んだ反対側に座る上司に呼びかける。

「起きてください、更科専務。あと一時間ほどで着きますよ」

「んあ？」

口を開けて寝ている姿は、酔っぱらったオヤジにしか見えない。

蒼馬君が私に声をかける。

「お水もらいましょうか？」

「ああごめん、ボトルがあるから私は大丈夫よ」

本来なら私が蒼馬君のお世話をしなければいけないのに、これでは立場が逆だ。

——蒼馬凌、二十三歳。

彼は、現在日本で人気上昇中の若手歌手だ。その繊細でいて安らぎを与えてくれる声に惹かれる人は、少なくない。弾き語りを得意としていて、弦楽器ならほぼなんでも弾けるといいう、実に音楽の才に溢れた人物。私が勤務するレコード会社の社長自ら、彼をスカウトして芸能界に引っ張り込んだ。

当然本名で活動しているわけではなく、芸名はRYOである。本名の漢字、凌が「りょう」とも読めるので、社長が命名した。その彼と専務の三人で、今回渡米することになったのだ。

無事に飛行機が到着し、バゲッジクレームで荷物を取って、ようやくほっと一息ついた。目的地の空気を肌で感じ取る。

「着いた〜！ 流石に長時間のフライトは辛いぜ」

「おじさん臭いですね、専務」

これと言ったのは私ではなく、蒼馬君だ。軽くストレッチをし、肩をコキコキと鳴らす上司を見

れば、まあそんな感想を抱いてしまうのも仕方ない。事実、専務は五十間近のおじさんだし。

「あ？　なんだよRYO。お前だって疲れただろ？」

「ビジネスクラスが思った以上に快適だったの、それほどでも」

「二十代の青年と同じ体力ではないんですから、比べても不毛ですよ」

私がフォローになっているのかいかわからない発言をすれば、じろりと睨まれた。

「なんだ、雨宮。お前だってぐーすか気持ちよさげに寝てただろ。いびきかきながら」

「え、いびきかいてたの、私？」

慌てて蒼馬君に確認すれば、彼は笑顔で否定した。どうやら専務にからかわれただけらしい。

「お前、寝不足か？　まさか昨夜は緊張で眠れなかったなんて言うんじゃないだろうな？」

「緊張しないわけではないじゃないですか。私だって、こんな仕事はじめてなんですよ？　なにか粗相をしたらと思うと……」

必要な書類は持ったか、宿泊の手配はできているか、訪問先への手土産は準備してあるかとか、気になることはいくらでも出てきた。万が一のことも考えて、臨機応変に対応できるように服をそろえなくては、などとやっていたら、あつという間に時間が過ぎていたのだ。おかげで昨夜は一睡もしていない。

そう訴えると、「だからそんな大荷物なのか」と呆れたため息をつかれたが、ここはあえて無視する。女性性は男性みたいに少ない荷物で身軽に移動できないのだ。

「私のことより、迎えが来る前に身だしなみ整えてきてください。蒼馬君も……つて、まあ君は大

丈夫か」

いつ見ても癒やし系オーラが出ている彼は、清潔感溢れる好青年だ。だから彼は問題ない。むしろ私は自分の心配をしたほうがいい。

化粧室に寄って髪とメイクを直し、ジャケットを手に持った。九月中旬のニューヨークはまだ真夏の陽気だと、天気予報が言っていたことだし。

ふたりと合流し、決められた場所へ向かう。これから会いに行く先方の会社が、迎えるの車を手配してくれたのだ。

待っていたのはイエローキャブでも、社員の車でもなかった。真っ黒で、見るからに豪華なリムジン。運転手が全ての荷物をトランクに詰め込み、私たちを促す。

「僕、リムジンなんてはじめて乗ったんですけど……」

「大丈夫よ、私もだから」

折角広々とした車内なのに、何故か固まって座る日本人三名。車のなかで広すぎるっていうのも、落ち着かない……

「仕事でニューヨークに来られるなんて、ちよつとびっくりですね」

外の景色を眺めながら弾んだ声で言う彼は、これからの仕事が楽しみで仕方がないようだ。

「雨宮は来たことあるんだよな？」

「……ええ、昔ですけど。高校生のときに三カ月間ほど」

ほんの一瞬、ドキリとした。忘れかけていた記憶がこの瞬間、水面に浮上した気分になる。

「三カ月間ってことは、留学かなにかですか？」
 「うん、うちの高校の姉妹校がニューヨークにあってね。交換留学ってやつで、二学期をここで過ごしたことがあるのよ。もう十年も前の話だけど」

そうだ、あれからもう十年経った。

二度とこの地には来ないと、日本に帰国したあのときは思ったはずなのに。大人になると、遠いと思っていた場所は案外すぐ近くなのかもしれない。

フリーウェイを走るリムジンから、外の景色を眺める。薄れていた記憶が甦ってきた。連鎖的に、私を呼ぶ彼の声が、一瞬脳内に響く。

『ユウカ』

まるで逃げるように帰国したあの日。

とつくに縁は切れて、会うことはないと思っっているけれど、もし今回、彼に偶然出会ったら……。きつとそれは、あのとときの過ちと向き合えという神のお告げなのだろう。



雨宮優花、二十七歳。

音楽大学を卒業後、大手レコード会社、クラウン&ミュージックレコードへ就職した。

音大ではピアノを専攻していたけれど、自分レベルの人はごまんといて、とてもじゃないがプロ

としてやっていけるとは思えなかったのだ。

そうしてプロのピアニストは諦めたものの、今は好きな音楽に携わる仕事ができている。おかげで、充実した毎日だ。

入社してしばらくは、プロデューサーのアシスタントをしていた。しかし三年前から、RYOのマネージャーを任せられている。何故私がマネージャーに抜擢されたのかは、今もって謎だ。

とにかく、その日以来私の仕事は、二十歳の青年を売れる歌手にすること、となった。

当の本人は、社長がスカウトしてきただけあって、素晴らしい才能の持ち主。

まず声がいい。話し声も柔らかくて落ち着くが、彼の本当の持ち味はその歌声にある。彼の声は神秘的で、心が安らぐのだ。ひと言で言えば、美しい。ストレス社会ですり減った人々の心をほぐしてくれる効果が、その歌声にはある。冗談ではなく、真剣にそう思う。

しかも、楽器も弦楽器ならほとんど弾けるといふ多才ぶり。ヴァイオリンやチェロは、クラシック部門を担当する同僚が聞いて絶句するほどだった。どつぶりクラシックに浸かって来た私も、啞然とした。

……本当、いるんだなあ、こんな人。

いろんな面で不器用と言われることが多い私とは正反対だ。はじめは少しだけ、羨ましいと思っ

てしまった。
 今まで綺麗な歌声を持つ人はたくさん見てきたけれど、その人たちと比べても、彼には非凡なオーラがある。見た目もよくて声も素敵、そして音楽の才能に溢れている。すぐに私は、全力で彼

を一流のミュージシャンに育て上げようと決意した。

そしてデビューから三年目。またとないチャンスがやってきた。

なんと海外の有名アーティストとのコラボレーション企画が舞い込んできたのだ。それは、北米で活躍する人気バンドと一緒に舞台に立つというもので、全米デビューの足がかりにもなりえるチャンス。

デビュー直後から国内では人気となっていたR.Y.Oだが、海外はまだ全然、というタイミングで飛び込んできた話だった。

些か駆け足な気もするが、悪くないタイミングだ。社長はやる気満々。本人も、憧れていたバンドとコラボができることに興奮している。これが成功したら、ワールドツアーもいけるかも！と、社内で囁かれていた状況だ。ちなみにマスコミにはまだ公表していないので、一部の人間しか知らないことだが。

今回は、その契約の最終的な確認のために、遠路はるばるニューヨークにまで足を運んだのだ。

契約は最終段階とはいえ、まだ確定ではない。いつ、この話がなかったことになるかわからない。最後まで気が抜けないので、十分に気を引き締めて敵陣に乗り込む覚悟を決めていた。……当の本人は、のほほんとした表情で「マンハッタンは活気がありますね」なんて微笑んでいるが。顔合わせと、生の歌声確認のため、余裕を持って一週間滞在する予定だ。

ほどなくして、リズムジンは止まった。車から下り、各自自分の荷物を受け取る。そしてリズムジンの運転手にお礼を告げた。

「よし、行くぞ」

専務の後ろ姿をふたりで追いかけていたのだけど、蒼馬君が突然歩みを止めた。彼が見上げる先は、首が痛くなりそうなほどの高層ビル。そしてビルのエントランスに堂々と記されているのは、

私たちの取引相手——Music & Entertainment Record Inc.——通称、MER。

流石アメリカのレコード会社最大手と名高いMERだ。建物からしてすごい。

「持ちビルですよ。規模が大きすぎる……」

蒼馬君のつぶやきに激しく同意だ。何階まであるのかわからないほど立派なビルを所有する、大会社。うちだって日本では大手レコード会社として知られているが、レベルが違う。規模を比べて眩暈がしそうになった。

「なにやってるんだ？ ほら、行くぞ。ああ、言い忘れてたが、この社長は気のいいおじさんで人格者なんだが、今は体調が万全じゃないとかで、実質的には息子が仕切ってるんだよ」

「え、息子さん？ その人が新しい社長さんなんですか？」

蒼馬君の質問に、専務は首を振る。

「いいや、息子は副社長だ。確か就任が去年だったか。まあ、まだ一年ちょっとだが、すっげー切れ者で恐いって話だぜ？ お前らも気に障る真似しないよう気いつけるよ」

蒼馬君の顔に緊張が走った。

エントランスに入り、受付でアポの確認をとる。ビジター用のカードを三枚受け取り、広々とした待合室のソファで待つこと十五分。ようやく担当者が現れた。

『クラウン&ミュージックレコードの皆様ですね？ リチャードです。お会いできて光栄です』
大柄な身体に人のよさそうな笑顔。陽気な空気をまとい握手を求めてくるのは、この企画のプロデューサーをしているリチャード・ハリス。近くで見るとデカイ。一九〇センチはありそうだ。

更科専務が流暢な英語で対応する。蒼馬君と私を紹介し、私たちも握手を交わした。

『おや？ そういえばヤスはどちらに？』

いるはずのもうひとりが見当たらないため、リチャードは私の背後に視線を投げる。

『申し訳ありません。彼は虫垂炎で入院しておりまして、今回はマネージャーの私がアシスタントをさせて頂きます』

『なんと！ 彼は入院しているのか……。大変だな。それならまた次回に会えるのを楽しみにしていよう』

大げさなまでのリアクションは、流石アメリカ人というかなんというか。

この企画の日本側プロデューサーである、ヤスこと安永さんは、実は出発前夜に緊急入院してしまったのだ。その旨メールで連絡はしたんだけど……確認していないんだな、リチャード。

荷物を預かってもらい、案内についていく。高級ホテルのようなロビーにドギマギしていたが、フロアを上げれば普通のオフィスだった。日本のオフィスよりも広々として、空間が広く取られているから、開放的なイメージがある。

各部署の前を通り、収録スタジオなども軽く案内される。至るところに貼られているポスターは、当然ながら所属タレントやミュージシャンのもの。大物アーティストの直筆サイン入りポスターな

んで普通に画鋲で貼られていて、すごいと内心つぶやく。これ、ファンが見たら『そんな通路に無造作に貼るなんて！』とか言って絶叫しそう……

皆でエレベーターに乗り込んだ。

こっそり専務に、「会議室にでも通されるんですか？」と尋ねれば、彼は首を振って否定した。

「今からボスに会わせてくれるんだってよ」

「ボスって、彼の上司ですか？」

ふむ、ジェネラルマネージャーとか、そんな役職の人だろうか。アメリカ人の言う上司はすぐ上の人なのか、もしかしたらもとお偉いさんなのか、見当がつかない。

私の英語力は、一応ビジネス英語が通用するくらいのレベルだ。翻訳もないなか、複雑な契約内容でも語られようものなら……

いや、大丈夫でしょう。専務は適当に見えるおっちゃんだけど、英語はペラペラだ。そのあたりは彼にまかせておけば問題ないはず。

エレベーターが止まった。降りた瞬間から、先ほどまでとは明らかに格が違うフロアだとわかる。カーペットもふかふかだ。些か、ヒールが引つかかる。

両開きの扉の前で立ち止まり、リチャードがノックした。私たちを連れてきたと言うと、なかから低いバリトンが響く。その声は、思った以上に若くて、逆に妙な緊張感を覚えた。ピリツとした空気を感じながら、蒼馬君の肩を軽く叩く。

「行こう、RYO」

「はい」

主役を促しなかにへ入る。この部屋の主が立ち上がった。

「お会いできるのを楽しみにしていました。MERの副社長の、ライアン葛城と申します」
流暢な日本語で私たちに友好的な挨拶をするのは――

「ヒロキ……」

声に出たのかわからないほど小さなつぶやきは、幸いなことに誰の耳にも届くことはなかった。



まさか、なんで。嘘、こんなことが――

葛城大輝――。記憶のなかの彼は、着崩したブレザーの制服に派手な髪色とピアス、ブレスレットやネックレスをじゃらじゃらとつけている少年だった。ひと言で言えば、チャライ。軽くて不真面目な悪戯好きの少年で、教師も両親もずい分手を焼いたらしい。

だが今、目の前に佇む彼に、そんな昔の面影はない。

上質なスーツ、短く清潔感溢れる黒髪、甘さのない鋭い双眸。浮かべられた笑みに柔らかさは欠片もない。だが不思議と目が引きつけられる。まとう空気は、王者の品格。

同一人物ではないのでは？ と疑いたくなるほどの成長ぶりに、私は息を呑んだ。十年の年月を実感せざるを得ない。

自分の意思とは関係なく、その眼差しに一瞬で囚われる。身体の中を、得体の知れない電流が駆け巡った気がした。

「優花さん？」

「……っ！ なに？」

数秒、思考が停止していたらしい。隣からの呼びかけに、我に返った。動揺を気づかれないよう、いつも通りを装う。蒼馬君を見上げれば、彼が目で移動を促してきた。

「ああ、ごめん。行きましょう」

副社長室に設けられている応接セット。そこに座るよう言われていたようだ。座り心地のいい黒のレザーソファに腰を下ろした直後、彼の秘書と思しき若い男性がコーヒーを持って現れた。

『ありがとうございます』

私の声にこりと会釈を返した茶色い髪の男性は、雰囲気も柔らかく、この部屋の主とは正反対の空気を持っている。蒼馬君と近い雰囲気癒やし系だが、彼はすぐに部屋を出ていってしまった。ひとりで重く感じている室内の空気が、さらにずしんとのかかる。

だがそんな私の心の内になど気づかず、専務が口火を切った。

『改めて、はじめまして。クラウン&ミュージックレコードの更科と申します』

名刺を出した専務を見て、私も自分の名刺を取り出す。

『RYOのマネージャーの、兩宮優花です』

ライアン葛城と名乗った副社長に、動揺を隠して名刺を手渡した。彼がほんのわずかの時間、私

の名刺を凝視する。なにか言われるのではとヒヤリとしたが、結局何事もなく、名刺はテーブルの上に置かれた。

少し緊張気味の蒼馬君をリラックスさせるように、リチャードがフレンドリーな口調で話しかける。

『私は日本語はしゃべれないんだが、R Y Oは英語はいけるかい？』

ゆっくりとした話し方だ。

『ええっと、日常会話を聞き取るくらいですが……』

『それなら問題ないよ！ ジェスチャーだろうがなんだろうが、ようはお互い伝えたいことがなるとなくでも通じればいいんだから』

リチャードはニカツと笑って、蒼馬君を安心させる。なんとなくでも通じればコミュニケーションには問題ないなんて、実におおざっぱだ。でもその言葉に、蒼馬君は安堵したように頬を緩めた。

『で、ユウカは英語には問題なさそうだな。通訳はつけなくていいよね』

ネイティブには遠いけど、これくらいなら問題ないので頷いておく。

『R Y Oの評判は聞いているよ！ ヤスにCDを送ってもらったが、君の歌声は素晴らしいね。歌唱力も音域の広さにも惚れ惚れするが、なによりその声質が神秘的だ。心地よく耳に残る。バラードやシャンソンもいいが、ロックやゴスペルなんかもいけるんじゃないかと、アイデアが尽きないよ』

『光栄です』

ペラペラと話すリチャードに、時折専務が答え、蒼馬君が相槌を打つ。口を挟む暇もなかっため、私は先ほど出されたコーヒーを飲んでいた。

きつと高級な豆を使ったおいしいコーヒーのはず。なのに、苦さはおろか味がしない……

だけどそれは、コーヒーに原因があるわけではない。味が感じられないのは、会話に加わりながらも、その実じつくり私を観察している男のせいだ。彼は、私の一挙一動を見逃さず、些細な表情の変化も凝視している。

そんなまとわりつく視線と気配を無視し、ひたすらリチャードの会話に耳を傾ける。雑談に聞かせる三人の会話だが、そんな何気ない話からヒントを得て、今後の進行や企画の構成が固まってくるのだろう。

集中しないと。もう仕事は始まっているのだから。

『——それでは、続きはまた明日にしよう。今日は到着したばかりで疲れただろう？ 契約書のサインを含め、明日また来社してもらえるだろうか？』

『ええ、もちろん構いません。我々はこのプロジェクトを成功させるために来たので、それ以外の予定は特に入っておりませんから』

専務の答えを受けて、リチャードが視線で副社長にうかがいを立てる。彼が頷き返したので、リチャードはほっとした顔をした。

『いや、助かったよ。実は契約書の社長のサインが一カ所抜けていてね。気づいたのが昨日で、明

日にならないと完了できないんだ。こちらの不手際で申し訳ない』

『そうでしたか。我々は大丈夫ですよ。明日でもきちんと契約が交_かわさるのであればね』

アハハと笑いあうおじさんふたりは、どうやら意気投合したようだ。これが表面上の乾いた笑い
でなければ、だが――

ふたりの真意を正しく推しはかれるほど、私はまだ修業ができていない。

すっかり空_{から}になった白磁のコーヒークップに視線を向けた直後、ずっと意識し続けていた人物が
ふいに私を呼んだ。

『ミス・アマミヤ。君は今回のプロジェクトをどう思っている？』

大きく跳ねた心臓を宥_{なだ}め、こくりと息を呑む。

『……とても、興奮しております。絶対に成功させたいです』

これが、この人とはじめての会話だ。真っ直ぐ視線を合わせてそう告げると、言いようのない
感情が込み上げた。

ずっと会いたかった人。でも会いたくなかった人。

――私の弱さと過去の負い目を突きつけられるから。

忘れようと思いつけていた人物は、想像以上に魅力的な大人の男になっていた。昔よりもさらに
人を引きつけるカリスマ性を備え、男性的な色気を身につけ――

二、三言葉を交_かわしただけで、囚_{とら}われそうな錯覚を覚える。

そろそろ退室しようと立ち上がった私たちに、リチャードが声をかけた。

『そうだ、今うちの所属アーティストがスタジオで新曲の収録をしているんだが、見学していかな
いかい？』

『え？ いいんですか？』

リチャードの言葉の可否を確かめるように、蒼馬君は副社長にちらりと視線を投げた。副社長が
笑顔で頷く。

『ああ、好きに見学するといい』

蒼馬君が嬉しそうに微笑んだ。

じゃあ行こう！ と先導するリチャードに続いて、専務と蒼馬君が出口へ歩き出した。私も急い
で書類などを片づけ、彼らに続こうとした。――が、私が出ていくはずだった扉は、目の前でパタ
ンと閉じられてしまう。

「え……」

横目で扉を確認すると、扉を押さえる長い腕が見えた。背後に人の熱を感じた直後、大きな手に
左肘を掴まれる。

その行動に混乱するよりも先に、身体に甘い痺_{しび}れが走った。

心臓が大きく跳ね、血液が沸騰するようにさえ感じる。

冷静になるため一度息を吐いてから、私は背後を振り返った。

少年のころよりも伸びた身長。端正なアジア人寄りの顔立ちは、男らしい精悍_{せいけん}さが際立つ。見下
ろす眼差しは獯猛_{ぶいもう}で鋭く、甘さの欠片_{かけら}も見当たらない。先ほどまでの営業スマイルは消え去り、私

に向けられるのは捕食者の目だった。

「久しぶりだな？ 優花」

「……っ、ヒロキ……」

少年つぼさがなくなった声が、「優花」と正しい発音で私の名を呼ぶ。英語なまりではなく、日本人の発音で。記憶のなかの少年と目の前の男性が重ならず、違和感を覚えた。でも、それはきつとお互いさまだ。彼だって十年の年月を感じているに違いない。あのころと今の私じゃ、見た目も中身もだいぶ変わったはずだから。

腕を掴まれたままじっと目の前の男を見上げる。彼との身長差ゆえに首が痛い。

急速に引き寄せられるこの引力を、どこかで断ち切らなくては——。このままでは、泥沼にはまってしまう。

速まる鼓動を宥め、喉から声を絞り出す。

「久しぶり。元氣、だった？」

葛城副社長……もとい、大輝は眉根を寄せた。言葉選びを間違えただろうか、不安がよぎる。でも、彼から久しぶりと言ったのだし、間違っではないはず。

彼が私のことを覚えていたことに、戸惑いと同じくらい、嬉しさが込み上げる。

掴まれている腕を振りほどけないのは、かつて一度、思いっきり振りほどいてしまったことがあるから。あのときのことを、私は後悔と切なさとともに、ずっと忘れられずにいる。だからだろう。今、彼から向けられる熱に甘さはないのに、触れられて嬉しいと感じるのは。

けれど、その本心を悟られるわけにはいかない。私はさっと視線を逸らした。

至近距離で、彼は私の顎に手をかけ、上に向かせる。そして眼前で、色気に満ちた大人の男が挑発的に微笑む。

「ああ、元氣だったぜ？ 身体はな」

「……っ」

それは、心はそうではなかったと告げているのだろうか。

かつて自分が彼に放った、酷い言葉が甦る。本心と偽りをまぜて告げた、その言葉。二度と私を追わないよう、子どもだった私にできる最大限の方法で、あの日彼を突き放したのだ。忘れることができない、苦すぎる思い出。

だが過去は変わらない。私は意識的に無表情を装い、平淡な声を出した。

「そう。元氣だったのならよかった。元から丈夫だったものね」

「振った相手を心配するほど、お前はお人よしでバカだったか」

「……いい加減そろそろ離してください、葛城副社長」

投げられる言葉の刃など痛くない。むしろ、彼が忘れずにいてくれたことを喜んでいる私がいて——。どうかしている。

他人行儀な口調に気分を害した風もなく、彼は手を離れた。その隙に一步、二歩距離を置く。

用がないなら行っていいか。そう訊こうとしたところで、彼に先手を打たれた。

「なにか言いたいことはないか」

腕を組んでじっと見つめてくるその姿は、傲岸不遜で、俺様” という表現がピッタリ当てはまる。

同じ歳とは思えない貫禄は、きつと、上に立つ者としての責任と矜持を認識しているからだろう。「ライアンってミドルネームよね？ 今はそう名乗っているの？」

彼の本名は、大輝ライアン葛城。お父様は日本人とアメリカ人とのハーフで、お母様はアメリカ生まれの日系二世。

私が出会ったころ、彼はミドルネームであるライアンをほとんど使っていないかった。その理由も訊いたことはなかったが、今「大輝」と名乗っていないことに違和感があったのだ。

「ライアンのほうが発音しやすいだろ。それだけだ」

つまらないことを訊かれたと、わかりやすく表情に出す。ここは、昔と変わらない。ビジネスのときならまだしも、プライベートの彼は表情が読み取りやすいようだ。そしてそれは、苛立ちもすぐにわかるということ。だが、あえて彼が望む発言をしなかった私にとって、その表情は懐かしい。軽くうつむき視線を逸らした私に、大輝は「まあいい」と切り上げた。そしてどこか人を食ったような微笑を浮かべる。

「こうやって再会することになるとはな。世界は狭いってわけだ」

くつくつ喉で笑う彼に、小さく「そうね」と返した。

「お前は知っていたんじゃないのか？ まさか、取引先のトップのことも調べずに来たわけじゃないだろう」

「……残念だけど、そのまさかよ。私は彼のマネージャーで、契約に関しての内容を把握してはいたけれど、直接のやり取りは他の人間がやっていたし」

「……俺がレコード会社の経営者一族だってことは、忘れていたわけか」

忘れたわけではなかった。かつて、彼の父親——すなわち現在のMERの社長から、直接名刺を渡されたことだ。だが、その名刺は帰国後すぐに、実家の引き出しにしまい込んでいた。それに、この会社もその後経営方針が変わったのか、社名が一部変更されていた。

加えて、彼の一族の会社がどこなのか、私があえて情報を入れなかったというのもある。そして、忘れようと努力をしていたことも——

でも同じ業界に就職した時点で、もしかしたらほんの少しだけ接点を期待していたのかもしれない。

矛盾だらけの自分の心のため息を零しつつ、「名前が変わったから気づかなかったの」と返した。

「あくまでもそうくるか。もう、俺に対して興味もなければ関心もないと。……なら話は早い。お前が俺を無視できないようにしてやるよ」

「は……？」

距離が一步詰められる。毛足の長いカーペットに吸収されるから足音はしないが、近づかれた分当然ながら威圧感が増して、私は反射的に後ろへ下がった。

「ここで会ったのもなにかの縁だ。俺は二度とお前を手放す真似はしない」

「なっ……っ？」

手首を掴まれ引き寄せられる。身体は密着したが、彼が私の腰に手を回すことはなかった。二度と手放さないだなんて、まるで愛の告白みたい——なんて、自惚れるはずがない。彼の目に浮かぶ、複雑に絡み合う感情。そのなかに、憎しみにも似たものが込められていることくらい、私にもわかる。

間近で、記憶にはない匂いを感じた。この人はもう、私が知っていた彼ではない。十年の年月を改めて思い知らされ、無意識に口を引き締める。

たとえ報復を受けることがあっても、弱さや隙を見せてはいけない。

睨みつけるように見上げれば、うっすら嗤う彼と視線が交差した。キスができるほどの近さだが、瞬きも、視線を逸らすこともしない。怯んだら負けだ。

「契約書の不備が、逆に都合がいい」

「どういう意味？」

「ギリギリになって気づいたとは、たまには担当者もいい仕事をするものだ。——お前が俺との取引に応じるかどうかで、この企画の行く末が変わる」

「……なに言ってるか、わかってるの」

ニツと嘲笑うように、大輝は口角を上げた。

「俺の退屈しのに付き合うと約束するなら、RYOの公演を成功させ、その後の全米デビューを全面的にバックアップしてやるよ。だがここで断れば、明日日本にとんぼ返りだ」

「っ！」

退屈しのに付き合うというのがなにを意味するのか、わからないほど子どもではない。仕事を盾に、身体の間係を迫られているのだ。

私が彼の要求に応じなければ、今までがんばってきたことが無駄になる。

「真面目な優等生、いい子ちゃんなお前なら、周りの期待に応えずにはいられない。だが断ってくれてもいいぞ。俺は別に痛くも痒くもない。RYOがここで売れる」という確証はまだないんだ」

ギリ、つと奥歯を噛みしめた。

「最低……」

「最低な男にしたのはどこの誰だ？」

睡言でも囁くかのような、色香を含んだ声。そんな場合ではないと思うのに、頬に熱が集まる。だが同時に、告げられた言葉が私の心を刺す。

「返事は今でなくていい。明日の正午、ホテルまで迎えを寄越す。そのときに聞かせてもらおう。逃げたらどうなるか——わかっているよな？」

デスクに置いてある自社のロゴマーク入りメモを引きちぎり、彼はさらさらとペンでなにかを書き綴った。渡されたそれは、彼のスマホのプライベート番号のようだ。

ひったくるように受け取り、私は振り返ることなく部屋を飛び出した。



「優花さん、今までどこに行つてたんですか？」

副社長室を飛び出た後、通りかかった社員の人たちに尋ねて、なんとか蒼馬君たちに合流することができた。

「お手洗に行った後迷っちゃって」なんて、いかにもありそうな言い訳を口にしたところ、蒼馬君は納得してくれたらしい。

レコーディングスタジオでは、休憩中のバンドのメンバーと蒼馬君、そして専務が和やかに話している。その様子にほっとして、壁にもたれた。

脳内をぐるぐると、先ほど大輝に告げられた言葉が巡る。目の前には、嬉しそうに音楽について語り合う蒼馬君。自分はどうすればいいのか、思考がバラバラになってまとまらない。胸の奥が軋んだ。

わからない……

とりあえずもう、寝てしまいたかった。

そろそろ夕方の五時過ぎだ。実際のところ、ここで早めに身体を休めることも考えないと。自分だけでなく、蒼馬君と専務の体調に気を配るのも仕事のうちだ。

今日は帰る旨を告げ、見送りに出てくれたリチャードに挨拶をしてから、イエローキャブに乗り

込んだ。

「おい、雨宮。ホテルはどこにしたんだ？」

「MERからそんなに遠くない場所ですよ。サブウェイでも行ける距離で、車でも二十分あれば着くところ……。あ、あそこですね」

私が予約の手配をしたのは、日本にも名が知られているビジネスホテルだ。清潔で、ちゃんと眠れば問題なしという考えのものとセレクトだったが、専務は「折角だからあのホテルに泊まりたかったぜ」と、車窓から見える高そうなホテルを指差した。

「あんなところに連泊なんてできるはずないじゃないですか。経費の無駄です。セキュリティが万全で、クリーニングが行き届いており、交通の便がよくてそこそこな値段のホテルを探すのにどれだけ苦労したか。いくら夏休みが終わった時期だと言っても、ニューヨークなんて常に世界中から人が来るんですから。ホテルはすぐに埋まっちゃうんですよ」

「へいへい、わかってますよ」

目的地へ到着し、チェックイン手続きに入る。

長袖のスーツを着た金髪の女性が対応してくれた。

代表として私の名前で三部屋取つてあるので、まとめてチェックインしようとしたが――

『え？ 二部屋しか取れていない？』

『はい。ご予約は二部屋と承っております』

『いえ、そんなはずは……確かに三部屋予約してあるんですけど』

プリントしてきた予約完了の紙を渡せば、彼女は不思議そうな顔をしながら再度調べはじめる。しかしなにかに気づいたのか、申し訳なきように『こちらのシステムでは二部屋しか承^{うけたまわ}っておりません』と告げた。

『え〜……つと、それじゃもう一部屋空いていますか？』
返って来た答えはNOだった。

まさか予約したはずの部屋が取れてなく、そして満室とは。海外でこの手のトラブルはよくあることだとわかつてはいても、疲労感が増してしまう。

仕方がない、ふたりに部屋を譲って、私はどこか違うホテルへ移動するか……。幸い、この辺りはホテルが集まっていることだし、ひと部屋くらいすぐに見つかるだろう。

諦めて二部屋分のチェックイン手続きを進めようとしたら、それまでどこかへ電話をかけていたお姉さんが笑顔で私に告げた。

『すぐ近くの系列ホテルに空きがありますので、そちらに部屋をご用意させて頂きます』

『え？ 可能なんですか？』

疑問符を浮かべた私に、彼女は完璧な笑みで『グループ会社なので』と言った。

フロントで名前を告げればいいとのことなので、ロビーのソファで座っているふたりのところに向かう。彼らに、このホテルのカードキーを手渡した。

「それじゃ、私はこれで。夕食は七時にここで待ち合わせにしましょう」

「つて、兩宮。お前は何階なんだ？」

「聞きようによつてはセクハラになりますよ」

「部屋番号まで聞いてないだろう」

わざと誤魔化したが、当然ながらかわされる。とりあえず事実を告げて、自分はずぐ近くのホテルへ移動すると伝えた。

「優花さんだけ違うホテルなんですか？ 部屋が取れてなかったつて……」

「そりゃよくあることだが……。で？ どのホテルなんだ」

正直に言えば専務は「ならそこには俺が泊まるう」と言い出した。

「いいですけど、ランク的にはこと変わらなと思いますよ？ また暑いなか、スーツケースをガラガラ引いて十分ほど歩きますが。それでも構わないのですしたら――」

「部屋が取れなくて残念だったなあ、兩宮君。気をつけて行くんだぞ」

ガシッと蒼馬君の肩を抱いてエレベーターに向かう専務。

「僕が代わつても……」

蒼馬君の声が聞こえたが、「お前はひとり外に出るな」と専務に言われていた。

ふたりがエレベーターのなかに消えたのを見てから、私はデカイスーツケースとキャリーケースを持って、再び暑い外に出た。

汗をかきかき歩くこと十数分。到着した新しいホテルは、あれ？ と首を傾げるほどに、豪華な外装をしていた。先ほど専務が泊まりたがっていたホテルと同じレベルに見える。

まさかここ？

ラグジュアリーな雰囲気たっぷりのロビーに、立派なシャンデリア。適温に設定された内部は涼しくて、外の暑さが嘘のようだ。すぐにホテルのボーイさんが、私の荷物を預かってくれた。

本当にここで大丈夫か——。ドキドキしながら、フロントに行く。

『先ほど部屋を取って頂いたユウカ・アマミヤと申しますが……』

『承うけとっております』

にこやかに応対してくれた男性に、ルームキーを渡される。こんなにスムーズに？ 驚きを隠せない。

一泊だけとしても、宿泊代が怖すぎる。そう思い、チェックアウトの時間とともに料金を尋ねれば、彼は何故か首を横に振った。

『え？ 無料？』

『こちらの不手際ですので。宿泊代は頂けません』

今までそんなサービスを受けたことはない。

いいのだろうかど戸惑いつつも、疲れていたこともあって、ありがたく甘えることにした。

チェックアウトの時間は十一時。朝は問題なさそうだ。

私は夕飯の待ち合わせ時間まで、ゆっくり過ごすことに決めた。

シャワーを浴びて汗を流し、簡単に化粧をする。時間を確認すると、自分が告げた約束の間まであと三十分だった。そろそろ出かけたほうがいいだろう。

堅苦しいスーツやジャケットは脱いで、シンプルなワンピースに着替える。髪は再びクリップで

留めた。

「そういえば、あそこのホテルに明日から部屋が空いているか、訊き忘れた……」

すっかり戻る気でいたけれど、まずは空きがあるか確認せねば。薄手のカーディガンを手には、貴重品をスーツケースに仕舞ってから部屋を出た。

待ち合わせ時間前に着いたので、フロントにいた先ほどのお姉さんに尋ねた。回答はというと、ちようど私たちが帰国する日に空くとのこと。

「……それじゃ、意味ないわ」

がっかり項垂うなれたくなる。ならばと、今私が泊まっているホテルに宿泊を続けることは可能かと訊けば、あっさり『OK』と言われた。

『こちらから連絡しておきますね』

『よろしく願います』

とりあえず、滞在場所はなんとかあったらしい。よかった。いや、お値段的にはよくない。無料なのは、今夜の分だけだろう。一週間はここに滞在する予定なのだ。残り日数分の宿泊費が一体どうなることか——

「優花さん、どうされたんですか？」

ロビーに下りてきた蒼馬くんに声をかけられた。

「うん、いつから部屋が空くか確認したんだけどね、タイミンク悪く私たちが帰るまで満室だったからさ。私はこのままあのホテルに泊まるわ」

「大変ですね……。いつそ皆でそちに移動したほうが、優花さん楽なんじゃないですか？」
「楽は楽だけど、大丈夫よ。移動する時間を考えたらそれも手間だし。私がない間は専務と行動してね」

「プラスふたり分の部屋代が怖い……。なんて本音は言えない。」

専務を待つ間にガイドブックで日本食レストランを調べると、近場に数軒あることがわかった。

お店を絞り込んでいたら、ようやく専務が「悪い悪い」と手を振りながらやってきた。

「んじゃ行くか」。RYOはちゃんとグラスンかけておけよー」

「了解です」

海外だからって気を抜けないのは芸能人の宿命だ。日本人が多いから、どこでバレルかわからない。私も紫外線防止用の帽子を被り、日が陰ってきたものまだ明るい外を、三人で歩いた。



「……食べ過ぎた」

調子に乗っていつもと同じ品数を注文したが、一品ごとの量が多すぎた。

ホテルに戻りぐったりとベッドの上で寛ぎながら、目を瞑る。浮かぶのは、彼との取引のことだ。期限は明日の正午。それまでに私は覚悟を決めなくてはならない。

彼の言いなりになるか、なんの成果も出せないまま日本に戻るか。

——だが、後者の選択は絶対にできない。

会社全体の期待を背負っているこの案件を、私ひとりの事情でだめにするなんてできるはずがない。

なのに、あの男は平気で私情を挟んでくる。自分の言いなりにならなければ企画を白紙に戻すなんて、脅し以外の何物でもない。

横暴だと憤る一方で、甘い喜びを感じる自分がいる。

忘れられていなかったことも、仕事を盾に関係を求められることも、心のどこかで私は嬉しく思っているのだ。

この取引を持ちかけてきたのは、私への執着が残っている証拠だと考えてしまう。本当にどうでもいい相手なら、彼は無関心を貫くはずだから。

「……浅ましいほど都合のいい解釈だわ。大輝がまだ私に好意を持っているかもなんて」

そんなことはあり得ない。だから、いくら今、私が彼に再び心を奪われていたとしても、その本心は絶対に気づかれてはいけないのだ。

アラームを七時にセットし、ひとりで寝るには大きいダブルベッドに潜り込んだ。

しかし本格的に眠気がくる前に、スマホの着信音が流れた。

見覚えのない番号。ホテルの電話から、蒼馬君か専務がかけたのかもしれない。

「はい、もしもし」

『すぐに出たのはほめてやる』

「……っ、大輝」

電話越しの声を聞いただけで、心拍数上がる。私の名刺に書かれている電話番号に早速かけてきたのだ。

『明日の朝七時にホテルのロビーで待ってる。迎えに行く』

「はい？」

意味がわからない。

困惑している私に、彼は『朝飯に付き合え』と言った。

朝ごはんは各自でとることになっているので、私があつちのホテルに行く必要はない。だから適当にすませようと思っていたのだが……

「約束の時間は正午じゃなかった？ ずい分早いんじゃないの」

『正午とは言ったが、それより早いのがだめだなんて言っていない。そして、正午まで会わないとも言っていない。リミットが正午だ。返事については、俺はいつでもいいぜ？』

「……ムカつく」

大輝は、喉の奥でくつくつと笑いを零す。

『七時にロビーまで下りて来なかったら、直接部屋に押しかけるからな』

一方的にそう告げて、彼は電話を切った。

どうして私が泊まっているホテルを把握しているの。押しかけるって、部屋番号までわかるはずがない——

数々の疑問が頭をよぎるが、考えるだけ無駄だ。

私はスマホを強く握りしめた。

2

高校二年生の二学期。私は通っていた学校の姉妹校へ、交換留学に行くことになった。

ニューヨークにあるそこは、姉妹校といっても、基本はアメリカの私立校。話す言語は英語が主だ。

ホームルームが存在しないアメリカの高校生活で、緊張感に溢れていた留学初日。選択科目の化学の授業に遅れてやってきた男子生徒がいた。

黒髪に金と赤のメッシュ。着崩した制服に、ネクタイはしておらず、代わりにドクロなどのネックレスをじゃらじゃらつけている。そして耳には複数のピアス。

ひと言で表せば、チャライ。

軽くてチャラくて、不良の香りが漂うその彼は、真面目が取り柄と言われる私には縁のない人種だ。

留学先で平穏な生活を送りたい私が近寄らないでおこうと決めるのに、時間はかからなかった。

それなのに——授業終了後、彼は一度も目を合わせていない私の手首を突如掴み、クラスメイト

の前でこう言ったのだ。

『ひと目惚れした。付き合ってくれ』

お互い初対面で、名前も知らない。ひと言も話してもいい。

ひと目惚れされる要素がないことくらい、自分自身よくわかっている。きっとからかわれているか、罰ゲームなんだろう。

そう判断した私は、『軽くてチャライ人は嫌いです』と告げて腕を振り払い、その場を去った。

周りが大きく息を呑む気配を感じたが、あっさり無視して私は次の授業へ向かった。

それが、私と彼——葛城大輝との出会いだった。

それから数日後。

私は、校長室に呼び出されていた。

『息子を更生させてもらえないだろうか』

ある人物を筆頭に、次々と数名の教師が頭を下げる。

生まれて十七年、大人たちから頭を下げられる経験などそうあるはずもない。声も出せずにびつくりしている私に、大輝の父親と名乗った男性が、ここ数日学園をにぎわしている彼について語った。

『更生というのは言い過ぎかもしれないが——私たちがいくら言っても聞く耳を持たなかったのに、たった数日であの子はいい意味で変わった。髪を黒く染めただけじゃない。だらしなく着崩した制服もきちつと着るようになり、自宅の勉強室に向かうようにもなった。その姿を、家の者が何人も

目撃している。毎晩車を飛ばして夜遊びに行くこともなくなり、うちの弁護士も安堵あんぞしているよ。

聞けば、あいつは君に公開告白をしたと言っじゃないか』

突っ込みたいたいところがいくつもある。

勉強室ってなんだ。夜遊びなんて高校生のくせにそんなことしてたの？ 弁護士ってどういう

こと。

そして最後に言われた“公開告白”という単語。思わず、目が据わる。

大輝の父親が、洗面しょうめんを貼り付けたまま再び頭を下げた。

『親としても情けないが、協力してもらえないだろうか。節度ある学園生活を送るよう、うちの息を真面目……いや、少しでもまともな高校生にしてほしい』

真面目な、と言おうとして咄嗟とつとに無理だと判断したらしい。

私ははつきり『お断り致します』と答え、その場を辞そうとした。しかし、校長に止められる。

校長の話をまとめると、どうやら葛城家は、この学園の創立に深くかかわった家柄らしい。

そして葛城さんは大手レコード会社の社長であり、この学校の理事会役員でもある。

つまり色々な大人の事情がある、というわけだ。

『恥を忍んでお願いしたい』と再度頭を下げられれば、『あまり期待しないでくださいね』と言って引き受けるしかなかった。

まったく、「自分のアイデンティティーはどうした！」と訴えたくなるほどの、あいつの変わりっぷりが憎い。

なぜなら軽くてチャライ人が嫌いと言えば、彼の見た目は、翌日にはシンプルなものになっていったのだ。

そして私を見かけるたびに『ユウカ、俺と付き合う気にはなったか?』と所構わず言ってくる。その度に私はこう返した。

『授業をサボる人は嫌いです』

『不誠実で不真面目な人は嫌いです』

『頭の悪い人は嫌いです』

根が素直なのか、ただ単純バカなのか。

夜遊びや異性との関係をきっぱり断ち切って、彼はきちんと授業を受けるようになり、学生の本分である勉学に励むようになった。その変貌ぶりに、教師からお礼を告げられたことは、一度や二度ではない。葛城夫妻からはたびたび有名店のお菓子が届けられた。食事をごちそうになったこともある。

過度な期待をされても困る——。余計な重責を背負わされた気分になり、はじめのころは彼の存在を鬱陶うとうとうしがっていた。

それがいつしか違う感情が芽生えてくるなんて——

当初はまったく、想像してもいなかった。



……懐かしくて、嫌な夢を見た。

ぼうっとする頭をゆつくり覚醒かくせいさせていく。いつもは起きると忘れてしまうはずの夢が、今日に限ってははつきりと思い出せた。

それは記憶の彼方かなたに葬り去っていたはずの、過去の断片。

当時、勉強ばかりしていた私は、自他ともに認める真面目な優等生だった。

肩につくつかないかのポブカットに、きっちり規定どおりに着た制服。若干きつめに見える目と、すっとした鼻筋は、和風美人と呼ばれていた母親似ではある。

だが、決して美人といえるレベルではなく、華やかさの欠片かけらもない、本当に平凡な女の子だったのだ。ひと目惚れされる要素など、まったくないはず。性格も地味だったし、さらには他人を寄せつけない壁を作っていたと思う。

そんな、必要最低限の社交性しか身に着けていなかった私に、あの男は見えない壁を無理やりぶちやぶって、好き勝手言ってきたのだ。

「つて、そんなことよりも、今何時?」

ベッド脇のデジタル時計を見て——目を見開いた。

「六時四十分!? 六時に目覚ましセットしてなかったっけ?」

スマホを確認すると、午後の六時に設定してあった。ありえないレベルの初歩的なミスだ。

「まずい、急いで仕度しないっ!」

来る。彼なら絶対、宣言通りここまでやって来る。

あの口ぶりから、私の部屋番号を入手するくらい造作もないのだろう。急いで準備をせねば。

長袖カットソーと濃い色合いのジーンズを着て、最低限のメイクをして六時五十五分に部屋を飛び出した。が――

扉を開けたと同時に、待ち合わせているはずの人物が目の前について、身体が硬直する。

「……なんているんですか」

「十分前になっても来なかったから迎えに来た」

「待ち合わせは七時ですよね？」

「日本人は待ち合わせ時間の十分は前に来ているはずだろう」

余裕をもって行動する人は確かに多いけど、そうとも限らない。そう言いたいのをぐっと堪える。

大輝はひと言「行くぞ」と言いつて歩き出した。お互い会話がなのままエレベーターに乗り込み、

無言でロビーまで下りる。

会話こそないものの、意外なことに、彼はひとりできつさと先を歩いたりしなかった。私の歩調にあわせて歩き、ホテルのドアも引いてくれて、私を先に行かせる。さりげなく、レディーファーストの扱いをされている。本人は意識していないのかもしれないが。

外に出て、ようやく私は口を開いた。

「どこに行くの？」

「朝飯。近くにコーヒーとベーグルがうまい店がある。ベーグルは嫌いじゃないだろ？」

問われて思わず頷く。

目的の店は、かつて来たことがある店だった。大通りから一本小道に入ったところに、十年経っても変わらず存在している。外観も内装も、記憶のままだ。

早朝だが、ビジネスマンで賑わっていた。テイクアウトの客も多い。大輝は店の奥のテーブル席で食べるつもりようだ。

「なにが食べたい」

「え……っと、ブルーベリーベーグルとオレンジジュース、かな」

「コーヒーは？」

「搾りたてのフレッシュオレンジジュースが飲みたい気分なんです。コーヒーだって嫌いじゃないけど」

「そうか。なら俺もオレンジジュースにしよう。お前は座ってる」

「はい？」

言うだけ言うと、彼は注文しに行ってしまった。

エリートサラリーマンの多いこのニューヨークのビジネス街でも、大輝の容姿は一際目につく。スーツを着たビジネスマンなんてたくさんいるのに、何故あも人目を引きつけるのだろう。均整のとれた身体つきだけじゃない。滲み出るなにかが、きつとその他大勢とは異なるのだ。

「オーラが違うってことよね……」

華やかな世界に住む人のみが持つ、独特な空気。自然と漂ってくるセラブ臭。

大輝のように圧倒的な存在感で他を魅了できる人間は、そういない。ふたり分のオレンジジュースとベージュを買って来た彼が、私の分を手渡した。

「あ、ありがとう。えっと、いくら？」

「知らん」

知らん、って。

彼が続けて「余計なことは気にしなくていい」と言ったので、とりあえずお礼だけ告げた。

オレンジジュースを啜ると、自然な甘さを感じた。見上げる彼も同じくオレンジジュースを飲んでいて、ふいに笑いが込み上げる。だってこの外見でオレンジジュースって……。食べているのもチョコレートチップベージュだし。

「そういえば甘いのが好きだったっけ」

思わず独り言のように漏れたつぶやきに、大輝が反応した。

「なんだ、興味がないんじゃないのか？ 俺のことなんて」

じっと見据える視線からは、からかいよりも、なにかを確認するような鋭さを感じる。口許は弧を描いているが、目は笑っていない。

「今思い出しただけよ。別に大した意味はないし」

「まあいい。で、今ならふたりきりだが？ 一晩寝て考えた答えを今聞かせるか、時間ギリギリまで粘るか。どうするんだ」

答えなんてひとつしかない。でもここで言うのは癪だから、無駄なあがきをしたくなる。

「——ギリギリまで粘る。だから大輝がお昼にどこにいるのか教えて」

「細かいスケジュールなんて俺は知らん。思いつきで行動することも多いからな。タイムリミットまでに、俺を探し出せよ。社内のどっかにはいてやるぜ」

「いい性格してるわね」

にやりと挑発的に笑う彼。私も負けじと笑みを浮かべ、テーブルの下で拳を握りしめた。



『Ms. Amamiya』

約束の時間ピッタリに専務と蒼馬君の三人でMERを訪れば、昨日と同じく陽気で長身マツチヨナリチャードが出迎えてくれた。大きく手を振る彼にお辞儀をして、朝の挨拶を交わす。

『おはよう、リチャード』

『時差ボケは大丈夫かい？ RYOもよく眠れたようだな』

『はい。今日もよろしくお願いします』

礼儀正しい蒼馬君の態度に、リチャードが微笑み返す。彼はそのまま、とある部屋に私たちを案内した。

防音性に優れているとひと目でわかる分厚い壁。

なかにはたくさんのお楽器や機材が置かれていた。こういった練習部屋は、基本どこも同じらしい。

そんな室内には、先客がいた。隣に立つ蒼馬君がハッと息を呑む。

『れ、RAY'z……』

『え？』

『おお、マジだ。予定には入ってなかったよな』

専務の発言に、手元のスケジュール帳を確認する。……ない。顔合わせはもっと先の予定だ。

『君がR Y Oだな。会えるのを楽しみにしてたんだよ』

R Y Oがコラボレーションをする予定のバンド、RAY'zの三名は、椅子から立ち上がった近寄ってきた。

蒼馬君は頬を紅潮させながら握手を交わしている。憧れの人たちに会えて、よほど嬉しいのだろう。

三人組であるRAY'zは、メンバーの名前の頭文字からそのバンド名ができています。

茶髪でくるくるな髪がトレードマークのRussel^{ラッセル}。赤毛でサングラス、ちょい悪オヤジ風で無精

髭が特徴のAndrew^{アンドリュー}。そして短髪のお金髪でタレ目がセクシーなYulin^{ユージン}。

デビューから二十五年。歳は皆、四十代後半だ。

目がバッチリ合った私は、慌てて手を差し出す。

『はじめまして、マネージャーのユウカ・アマミヤと申します』

『ユウカ、よろしく』

海外のミュージシャンと握手をしたのはこれがはじめてだ。楽器を操る手の皮膚は、硬くて温か

かった。

『君たちはブロードウェイには行ったかい？』

赤毛のアンドリューに尋ねられ、予定はあるがまだだと告げた。

『ぜひ行くべきだよ。とつてもエキサイティングでエネルギーをもらえる。いつもいい刺激を受けるんだ。本場のミュージックに触れて、インスピレーションをもらってこいよ』

そう言つて、RAY'zのメンバーは去つていった。どうやら移動中だったのに、ひと言私たちに挨拶をするためこの部屋で待っていてくれたらしい。

その気遣いと、嬉しそうな蒼馬君を見て——私にも覚悟が生まれた。

『リチャード、すみません。ちよつと少しの間、任せてもいいですか？』

『ん？ いいよもちろん。なにか用事かい？ レストランなら案内させようか』

『いえ、お手洗いでなくて……。ちよつと葛城さんに用事が』

『ライアンに？』

ほんの一瞬訝しむ顔をしたものの、彼はすぐに時計を確認した。

『今なら多分まだ部屋にいると思うよ』

そう言つて、私にウィンクをする。

なにか誤解されているような気がするが、考えるのはよそう。私はこれから、戦いに行くのだから。

ありがとうございますと小声で告げて、私は専務と蒼馬君に気づかれないよう部屋を抜け出した。

大輝に逃げられては困る。あの男は、時間に遅れたらためらわずこの企画をつぶすはずだ。

「決めたことを告げるだけよ。言ったら、早く戻ってこよう」

エレベーターに乗りフロアを上がって、昨日来た部屋に到着する。秘書に『どうされました？』と笑顔でにつきり尋ねられた。あの柔らかい雰囲気の男性だ。

『葛城さんに用があるのですが、彼はいますか？』

『ええ、どうぞ』

あっさり通された。おそらく、私が来たら通せとでも言われていたのだろう。

高層ビルからニューヨークの街並みがよく見える。

室内に入る私をニヤニヤ顔で眺めるその男は、窓際の椅子に座っていた。

「運がいいな。今戻ってきたばかりだ」

「それはよかったです」

「で？ 決まったか」

彼は、厳めしい顔で近寄る私をおもしろがっている。

——昨夜の食事中、専務が言っていた言葉を思い出した。

『あの御曹司の黒い噂ならいくつか耳にしたことあるぜ。隙を見せたら臍物まで喰われるってよ。お前らも気をつけるよ』

お前らも気をつけるよ』

デスクの目の前まで辿り着き、彼をじっと見つめる。

昔の彼は、こんな挑発的な笑みが似合う男じゃなかった。悪戯好きな悪ガキで、ワガママで傲慢

で。でも、根は素直。

その面影は、今では見当たらない。

変わってしまった大輝に向かって、私は精一杯、艶やかに笑ってみせる。

「女はね、二十七を過ぎたら、ニコニコしているだけじゃ生きていけないの」

ずるく、賢く、計算高く。

ビジネスの世界で生き抜くには、強くならなければ。

簡単には負けを認めず、涙だつて見せない。ましてや、恋にうつつを抜かして足をすくわれるなんて、もつてのほか。

私が彼の言いなりになるだけでこの仕事が成功するなら、それでいい。どんなに酷いことをされても、彼が相手なら、私は全てを受け入れる。

大輝は座ったまま私を見つめ続けた。

「お前の望みは？」

「この仕事の成功」

「お前が俺のものになるなら、全面的にバックアップしてやるよ。RYOがこの国でも成功できるようにな」

「口約束だけじゃないでしょうね？」

「それはこっちの台詞だ。お前の覚悟と、誓いの証を見せてみる」

書面には残せない。これはふたりだけの取引だから。

デスクを回り、彼の真横に立つ。精悍で野性味が増した彼の顔を至近距離で見つめれば、ふと、昔の姿が脳裏に浮かんだ。軽く頭を振って過去の幻影を追い払い、大輝の頬を両手で包む。薄く笑った彼の唇に、ゆつくりと自分の唇を合わせた。

『お前が俺のものになるなら——』

先ほど言われた台詞が、脳内で再生される。

「ふっ、ん……」

「舌、ちゃんと入れる」

「……っ、んんッ」

お互いの唾液音が、辺りに響く。触れるだけのはずだったキスが、次第に深いものへと変わった。彼は決して、自ら私の口内には攻め込んでこない。うっすらと目を開けると、ダークブラウンの瞳が私をじっと見つめている。

自分からは動かない。私が彼の頬を両手で包んではいても、彼は私に指一本触れてこない。

まるで、静かに命令を下す皇帝陛下だ。ただ仕える身の私は、主の要望通りに動くほかない。彼を満足させられれば、解放されるはず。なのに、大輝の熱はなかなか上がらない。絡める舌に応えはするものの、するりと逃げる。ただこの状況を楽しんでるだけのようで、満足する気配は伝わってこなかった。

正直、自分のキスに自信があるわけじゃない。人並みに経験はあるが、自分から積極的に舌を絡めあうようなキスを仕掛けたことなんてこれからはじめてだ。

脳裏に、今よりも少し高めの大輝の声が甦る。

『——やるなよ、誰にも。お前のはじめては、全部俺のものにしたい』

かつて彼は、私のファーストキスをそっと奪った。軽く触れるだけの、他愛もないキス。突然のことに、そのとき私の顔は赤く染まった。

だけど、嫌じゃなかった。

——それが全てだ。

私に大人のキスを教えてくれたのは、大輝ではない別の人。それでも間違いなく、私のはじめてのキスは、彼に捧げられた。

そんな、私に対してだけ純粹で真っ直ぐだった少年時代の大輝を思い出して、胸が軋む。彼が私を未だに好きだなんて思うほどうぬ惚れてはいない。彼がただ過去に執着しているだけだと、ちゃんとわかっている。そして大輝が私を憎んでいることくらい……

酸欠気味になった私は、ゆつくりと彼との繋がり解いた。銀色の糸が視界に映り、羞恥を感じ。椅子に座ったままの大輝は、息も乱していなかった。

ゆつくり息を整える私に、大輝は片眉を上げた。

「これで終わりか？」

「……十分でしょ」

ルーージュが移った自身の唇を、大輝が親指で拭う。色気まみれのその仕草に、羞恥心が募る。思わず手の甲で、ぐいっとお互いの唾液が付着した自分の唇を拭けば、その手を彼に掴まれた。